モアイ像と土木

―「ボーダー」を超えるということ―

建設機械といえば土木。土木といえば建設機械。だが、建設機械は建設作業だけのものではない!? イースター島にある倒れたモアイを修復したのは建設機械なのだそうだ。建設機械が文化財保護にも貢献しているなら、まさに土木と他分野のクロスボーダー。これ以上の説明は必要ないだろう。

クレーンでモアイを吊り上げて、立てて一丁あがり。

いや、そんな簡単なはずがない。ボーダーを超えることはときに想像を超える苦闘の連続であるという。どのようにして克服していったのか、そして乗り越えた先に、人は何を見るのか…。

ひらめき

1988年11月のこと。香川県高松市にあるクレーンメーカー、(株)タダノに勤務する当時26歳の高木啓行さん(現企画管理部部長)は、イースター島を取り上げたクイズ番組をたまたま見ていた。現地の人が「このモアイ像を復元できればいいなあ」というのを聞いた高木さん。

「うちのクレーンを使ったら、モアイを立てられるんじゃないか?」。

簡単そうに思えた。しかし、この先にさまざまな困難が待ち受けることを当時は知るよしもなかった…。

船出

「まずは会社には内緒で、日本の外務省や文部省(当時)に問い合わせたんですが、機材だけの有償提供はダメだというんです。『いわゆる建設事業としての協力ならよく、それへの付帯設備としてなら認められるのだが』と。費用の裏付けがなくては企画書を書けませんから、困ったなあと。それでいろいろ試行錯誤しているうちに社長の耳に届いたようなんです。当時、会社としてもクレーンメーカー全体のイメージアップを図ることがトップメーカーとしての責務だろうという認識があって、『ぜひやろう』ということになったんですね」。

会社を挙げてプロジェクトを全面的に支援することになったのだ。クレーン提供にかかる費用も会社が負担するという。それならば、クレーンを無償で提供できる。見返りのない「寄贈」の形ならば制度上問題ないのでは? 関係省庁に問い合わせると今度は「OK」という返事。こうしてプロジェクトは進みだした。しかし…。

関門

「イースター島には港がなく、クレーンを船でもっていくのは無理だということが判明したんです」

普通はあきらめそうなところだが、「駐日チリ大使館に何とかならないか頼みこんだところ、海軍が協力してくれるというのです。『上陸用舟艇』というのですが、年数回行っている島民への食料運搬の際に一緒に運んでもらえることになりました」。

だが話は簡単には終わらない。さらに難

しい要求がチリ政府から出される。

「モアイ像を修復する前に遺跡発掘調査が不可欠であるというのです。しかし当社は遺跡を扱ったことはありませんでした。さまざまなつてで、藤の木古墳の修復工事を手掛けた飛鳥建設の左野勝司社長を紹介していただきました。事情を説明したら『あほなことするなあ』と言われて（笑）。『相手は世界の7不思議の一つだ。七つぐらいの高い壁があるのは知っとるよな、乗り越える気概はあるか』と問われて、つい『あります』と言ってしまった（笑）」

祭壇復元の様子。無数の石が散乱している

左野社長の取り計らいで、奈良文化財研究所にも協力いただき、モアイ修復委員会が設立され専門家チームが結成されることとなった。

大海原

当初はモアイ像を立てるだけのつもりだった高木さん。しかし、チリ政府は昔日の如く遺跡を再現したいと言い出す。つまり、モアイ像の載る祭壇（アフ）を復元したうえで、モアイ像を立ててほしいのだという。長さ100m、左右に50mのウィング（翼）をもち、高さ3mという非常に大きな祭壇である。

「クレーンのうえから写真を撮って、無数に転がる石がそれぞれどこに存在していたかを記録して、一度取り去って、再び組み立てる。本当に気の遠くなる作業です」。膨大なピースの散らかる巨大なジグソーパズルを解いている感覚だったという。

モアイ像を傷つけてはいけない。同じ材質の石を探し求め、模刻をつくり何度も実験を繰り返した。モアイ像の風化は見た目以上に激しく、保存用の樹脂選定や専用治具の開発も必要だった。

復元作業はあくまで現地主体。クレーンの操作法やメンテナンス法を教授し、後は任せる。「現地の人にやってもらわないと意味がないですから」と高木さん。倒れたモアイは一千あまり、このプロジェクトですべてを復元できるわけではない。社員が去った後も現地の人だけで復元できるようにしなければならない。

1993年8月、ようやく一体のモアイが祭壇に立った。

新天地

2005年のこと。

「左野社長から、いきなり電話が入って『もろい石灰岩、しかも過去の地震の影響でひびが入る石材をもち上げて運ぶことができるか』と。後から高松塚古墳のプロジェクトだと知らされました（笑）」

モアイ修復プロジェクトの実績を買われて、高松塚古墳の石室解体作業にも携わることにもなったのだ。

「こうしたことを行ってつくづく思いますが、人と人との関係でしか物事は進まない、ということです」。

熱意がボーダーを超えさせる。分野を超えて人と人との関係ができる。そしてまた新たなプロジェクトが動き出す…。ボーダーとは、分野間に横たわる溝ではなく、実は人と人との壁なのかもしれない。

帰り際のこと。高木さんは言った。

モアイを釣り上げる。壊れないよう、慎重に…

「ほかの分野の方と仕事すると、『ああ、感覚が違うんだなあ』と驚くことも多いです。たとえば、同じ1mという数字を聞いても、機械屋さんは『粗すぎる』と感じる。mmオーダーでの把握が体に染みついているんでしょうね。一方で建築屋さんはmオーダーなんです。この違いは新鮮でしたね」。

分野間に横たわるボーダーを超えたとき、ある種のカルチャーショックもある。違う分野の人は違うものの見方をしている。

人は知らないうちに自らの分野の常識に染まってしまうのかもしれない。ボーダーを超えるとは、自分の思考の限界を超えることでもあるのかなあと、讃岐うどんをすすりながら、そんなことを考えた。

学生編集委員　葛西　誠
杉江　裕実